

わろま人形

説経人形の幕間に演じられ、使い手のセリフの掛け合いで進む滑稽な人形芝居です。

佐渡では「狂言芝居」とも呼ばれています。佐渡弁の巧みなセリフ回しで、時には時勢や人情の風刺も交えながら観衆の笑いを誘います。佐渡では廣栄座が、説経人形芝居とともに受け継いでいます。

舞台

説経人形と同じく、観客席と舞台を4尺5寸(1.5m)という高い腰幕一枚で隔てた原始的な舞台様式です。

演出

語り本や太夫の語りはなく、時事ネタを交えながら、面白おかしく方言でセリフを語ります。複数の演目がありますが、主役は常に愚鈍な「木之助」で、失敗して裸にされるというオチになります。他の登場人物は好々爺の「下の長者」、

人形首(かしら)

4個の首が県の文化財に指定されています。

木之助だけは、佐渡の人形には珍しく胴体と手、足があります。

男のシンボルは胴体に付いているものもありますが、廣栄座のものとは別に20cmくらいの桐の木に穴をあけて、ここから役者が水を吹き上げ、小便を出します。

代表演目『生地蔵(いきじぞう)』

四国遍路に旅立つ際、女房のお花に生地

根性よしで男好きの「お花」、腹黒い「仏師」です。下の長者の登場や、木之助が舞台を逃げ回る場面では、笛と太鼓のおはやしが付けられます。

衣装

木之助の着物だけは前をひもで結んであり、すぐに脱げるようになっていきます。

蔵を土産にせがまれた下の長者は、京の仏師を訪ね、生地蔵を二十五両で注文し四国へ渡った。腹黒い仏師は隣の木之助を生地蔵に仕立て、四国遍路を終えた下の長者に渡した。道中、生地蔵と問答を始めた下の長者は、仏とは思えない受け答えに不信感を抱き、調べようと争いになり、ついに木之助は裸にされて逃げ回る。

登場人物



木之助



仏師



下の長者



お花

「生地蔵」



四国のお遍路に旅立つ下の長者に、女房のお花が生地蔵を土産に買って欲しいとせがむ。



四国への道すがら、京の仏師を訪ねた下の長者は二十五両で生地蔵を注文する。



腹黒い仏師は隣に住む木之助をだまし、生地蔵に仕立て、四国から戻った下の長者に木之助を生地蔵として渡す。



喜んで持って帰った下の長者だが、道中、問答を繰り返すうち、偽物ではないかと疑問を抱く。



下の長者に追い回された木之助は、裸にされて放尿する。

